

地域の取組

人と人をつなぎ、林業を未来へ

一般社団法人 フォレストーズフォーラム

はじめに

次の世代へ繋いでいくには一体何が必要なのか。林業において緊急性の高いこの問いに向き合い、活動を行う団体「一般社団法人フォレストーズフォーラム」が2025年4月1日に発足しました(以下Fフォーラムという)。「人と人をつなぎ、林業を未来につなぐ」を理念に掲げ、静岡県内の林業従事者を中心に設立。発起人であり、長年現場の技術向上に努めてきた(有)天竜フォレストの今井保隆氏(Fフォーラム会長)と宮本林産の宮本卓明氏(Fフォーラム副会長)にお話を伺いました。



▲今井氏(左)、宮本氏

発足の経緯

「安全で安心して働ける産業でなければ、若い人は入って来ない」。これが、Fフォーラムを立ち上げた一番の理由だと今井氏は言います。文字にすれば至極当たり前のことと感じられますが、長年、現場を見続けてきた両氏だからこそ感じる危機感があります。一向に減らない労災事故。大きな変化の無い雇用待遇。軽減されない現場の過酷さ。林業における様々な課題を認識する中で、一番取り組まなければな

らない課題が“安全確保”ではないかと。安全に不安を抱いて辞めていった若者、実際に怪我をして辞めていった若者を両氏は何人も見てきました。それを無くしたいという強い想いが原動力となり、Fフォーラム設立へと向かったのです。

「私たちは二人とも林業が好きなのです。好きな業界が若い人に選ばれ、世代交代できる“つながり”が生まれる様にするにはどうしたら良いかを、みんなと一緒に考えたいというのが設立のきっかけです」と今井氏。Fフォーラムが目指す林業は「安全安心がつながる林業」「技術がつながる林業」「知恵がつながる林業」であり、この3つを軸に活動を行うことを宣言しています。



▲正会員の方々



▲正会員の方々

安全への課題は何か

では、なぜ安全が実現できていないのでしょうか。実現には単なる意識改革ではなく、技術の継承と標準化が不可欠だと言います。「技術を“見て学ぶ”の文化では、我流が蔓延して安全にはつながらない。業界全体としてスタンダードな技術に合わせ、きちんと伝えていく必要がある」。昔は林業に限らず、様々な職種が“見て学ぶ”の世界でしたが、時代を経てその文化は変化して来ました。林業においても、緑の雇用制度が始まったことでスタンダードな技術を伝えるベースが出来つつあります。しかし、全国の緑の雇用の定着率は3年で約68%、5年で約58%、10年では約45%という現実があり、せっかく入って来た若者をつなげていく必要があります。

そして、今井氏はもう一つの問題点を提示されました。「私が見て来た林業は非常に属人的。個人の能力により安全と成果が決まり、その人の経験や知恵や技術は一緒に働いている人に伝わっていない。林業もチームプレーにしていきたい」と。それぞれの現場に眠る個の知恵を見える化し、互いに学び合える仕組みをつくるが必要なのです。



▲伐木造材技術講習会の指導

具体的な活動内容

まだ発足して間もないため、すでに実施している活動は研修の受け入れ等に留まりますが、活動の内容としては静岡県伐木技術競技会の開催、林業従事者を対象とした「サロン」や「セミナー」の実施、学生の実習受け入れや就業支援などの人材の獲得に向けた活動を計画しています。これらを通して、林業で悩んでいる社員や経営者も、視野を広げられる場になることを目指しています。

面白い活動を行っている林業関係者は県内外にたくさんおり、経営者や技術者を招いたセミナーを来年度以降に年2回程度開催したいと考えています。「一方的に伝えるのではなく、参加者同士がディスカッションできる場にしたい、気づきの場にしたい」と、Fフォーラムらしいセミナーのあり方を目指します。

また、サロンでは、特定の日に正会員の誰かが指定の場所に1日張り付き、その日は誰もがそこに行けば自由に相談・交流できる機会を作りたいと言います。経営者はもちろん、若手でも、中堅でも、疑問や悩みを相談できる、いつもとは違った視点を取り入れることができるなど、業界にとって必要不可欠な場所になりそうな予感がします。



▲県立農林環境専門職大学 機械実習の指導

伐木技術競技会から考える

静岡県林業技術者協会は2025年6月、長い歴史に幕を降ろしました。Fフォーラムでは、同協会から静岡県伐木技術競技会を継承し、11月29日に第31回大会を天城ドームで開催します。静岡の競技会は生の木を使用するた

め現実の仕事に近く、前段で述べた“スタンダードな技術”を審査できます。競技会は、技術をつなげる方法の一つになるでしょう。しかし、今年は主催者や競技会の周知方法が変わったため、参加する林業経営体が限られるかもしれません。競技会に参加者を輩出している事業体は“スタンダードな技術”の大切さを認めている経営体であり、経営者が競技会への出場をリクルート等においてPRできると判断している経営体であるとも言え、競技会を上手く活用しています。



▲静岡県伐木技術競技会

緑の雇用で“スタンダードな技術”を学んでも、技術が身に付かない組織体制などがあると両氏は言います。「職場の中で人は上司や先輩の影響を受けるものです。一緒に仕事をしている上司や先輩から研修で習ったことに対して『そんなことはやらなくて良い』と言われたり、上司や先輩が基本作業を行なっていなかったりすればそうになってしまう」と今井氏。しかし、緑の雇用のOBや県の指導者養成を受講した者が班長クラスになっている経営体では、研修で習った“スタンダードな技術”が現場で反映され始めています。若手の育ち方において経営体の差が出始めていることを両氏は実感しています。

また、今後は地元の子供や若者が観戦できる、機械展やガイダンスを同時開催するなどの競技会の新しい形を思い描いています。「今出場している選手は若い世代が多く、女性の選手も出て来るなど、競技会では林業の新しい可能性を数多く垣間見られるので、一般の人たちにも見に来てもらい、同世

代やその下の世代にカッコ良いと思ってもらいたいですね」と宮本氏。他県においても競技会は行われているが「自分たちの競技会はスポーツとして極めるものではなく、つながるためのものとしてやりたいのです」と今井氏。競技会が林業の魅力を伝える場としても進化していきそうです。



▲静岡県伐木技術競技会 安全講習

共につなげる

少子高齢化、経済成長率の低さ、グローバルにおける日本の地位低下など、日本は全産業にとって厳しい時代に入っています。林業も変化に対応し、成長しなければ未来がありません。その未来に向けて林業をつなげていくことを目指すFフォーラムの発足は、静岡の林業界における希望ではないでしょうか。この『林業をつなげていく意思』が広がっていくことを期待したいです。

現在、Fフォーラムでは活動に共感いただき経済的な協力をいただける“賛助会員”を募集しています。来年度からは個人会員も募集する予定で、仲間を増やしていきたい考えです。個人会員になった方が活動のアイデアを提案することや、個人会員が立ち上げたものにFフォーラムが協力していくことなども期待していると言います。

「林業は待ちの姿勢が強い。しかし、自ら考え、動く人が出て来てほしいです」と今井氏は話します。静岡の林業の未来を描く、そのための土台作りが、今、静岡から始まっています。

Fフォーラムのウェブサイト

<https://forestersforum.jp/>